

14【街の散策からの気づき発見】

最勝院と春日部重行の墳墓・記碑

会員 K.T.

最勝院(さいしょういん)本堂西側の奥に春日部重行公御霊古墳の記碑が建立されている。碑には次のように記されている。

「南朝の忠臣贈従四位春日部重行公は逆臣北条高時の専横極まるころ、恐れ多くも後醍醐帝は吉野に遷され給い王業の光正に淡きを嘆ずる時、護良親王の令旨を報じ勤王の義兵を春日部に挙げ、建武元年(1334)新田義貞と共に弛張の賊北条氏を鎌倉に滅ぼし、建武の中興の大業を成す。

更に足利尊氏の反旗を翻して九州より東上するや大義の血潮渾(さかん)に燃え、これを京で迎え撃つ然れども南風遂に競わずして戦時に利あらず。

延年元年(1336)6月30日鷲の森において恨み深き自刃を遂ぐ、其の長子家繩遺骨を携えて帰郷し、最勝院に墳を築き此処に葬る。

大正7年(1918)其の功を嘉し、特旨を以て従四位を贈らる。」最勝院で春日部重行の墳墓を散策、ここでも新たな疑問があった。

「なぜ?大正7年(1918)に584年も前、建武元年(1334)の時代の春日部重行公の功を嘉し、従四位を贈ったのだろうか?」

疑問について、ネットで調べていたところ、春日部市立図書館の「郷土かすかべ電子化郷土資料」で、須賀芳郎 著『ふるさとかすかべ 春日部の寺院』という電子書籍が見つかった。須賀氏は春日部の郷土史研究者のようだ。氏には他に神社を調べた『春日部の神社』や伝承等の『かすかべの歴史余話』の著作もある。

さて、従四位の由来については、氏の著作『春日部の寺院』の最勝院の章で、このように記されている。

「第36代鷲尾諦仁僧正は、明治36年、京都醍醐三寶院から住職として、この寺に赴任されて、明治32年5月、放火により焼失した寺の復興に尽力されながら「春日部重行公」の事跡を調査研究して『春日部重行公事跡』・『春日部重行公勲功記』・『春日部重行事蹟考』を作成して、顕彰運動を推進し、大正5年、忠臣孝子節婦の調査で、公の事蹟を宮内省に具申した。大正7年、この具申により従四位の位を受けた。(後略)」

僧正は「何故?春日部重行を調べたのか?」、それについては、最勝院の創建前の沿革に記されている。

「最勝院の沿革【寺の伝えによる故老からの話】

最勝院は、現在の地に設置されたのは平安時代と思考される。最初は、この地の紀氏朝臣の子孫である。兵三武者實尚の四男の左衛門尉實高が在地名、春日部を名乗り春日部氏となった時、春日部氏の学問の師として迎えたのが、慈恩寺の別当裔尊僧正であった。初めは寺というより学問所として設置されたと推定される。後に慈恩寺から弘法大師作の『千住観音菩薩像』を移され、ここに寺を開いたもので、寺号も本寺の名称『華林山最勝院慈恩寺』と唱えたが、本寺と紛らわしくなるので、院号と寺号を入れ替えて『華林山慈恩院最勝寺』と称したと伝えられている。

元は天台宗であったが、『玉蔵院』の先々代の児島隆傳和尚より聞かせられたところによると、江戸時代になって、新義真言宗派の本寺が江戸に建立された、江戸付近の主要な町に、学僧を派遣して、『真言問答』を展開し、宗派の拡大の布教を始めて、「問答」に負けた寺は、その場で転派させられた時代があり、粕壁宿内の主たる寺は、新義真言宗智山派に隷属したのだと言われている。最勝院は粕壁宿近在の寺院の本寺であったので、それぞれの末寺も本寺に倣って転派されたと聞かされている。(後略)」

遙か昔の聞き語りらしいので、真意のほどは定かではない。しかし、歴史は繋がっている。大正7年(1918)の記碑建立の由来や春日部八幡神社散策の折り、疑問に思っていた春日部重行の時代と最勝院創建の時代との時間差は、学問所らしいことで繋がる。地域には郷土の歴史を残そうとした人々の努力があって、古い伝承が残されている。古きを訪ね、歴史の中の人々への思いを巡らすことは楽しいことである。

